

2020年6月14日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「小さくされた神」

聖書：フィリピの信徒への手紙2：1～11

今朝の手紙は、キリストの立ち位置を「小さくされた神」として表現している。キリストの誕生物語でも、人間が寝かされるはずのない飼い葉桶の中にキリストが寝かされていることが、「しるし」であり、「小さくされた神」としての表現がある。また、イエスのバプテスマにも「小さくされた神」としての表現をみる。

そのことについて大阪の釜ヶ崎でカトリックの司祭を勤める本田哲郎神父はこう述べている。「イエスご自身は、ヨルダン川という地球上で最も低いところを流れる谷底においてバプテスマを受けられた。谷底の、低みから、低みへと流れる、その水面下に全身を沈められた。それは、最も低いところに身を沈め、最も低いところから、この世の荒れ野を見つめられた…。この世の低みに立ち、低みから発信させ、低みに追いやられた者たちと連帯して行く。イエスのバプテスマは、そういうことではなかったか。」

本田神父の著書『釜ヶ崎と福音一神は貧しく小さくされた者と共に一』(岩波)がある。サブタイトルの「小さくされた」は、釜ヶ崎の人々がもともと「小さい」のではなく、「小さくされた」人々であるということ。社会の構図からはじき出された人々のこと。ただ本田神父が、釜ヶ崎の人々と共にいることで彼らを励まし、慰め、希望を与えることが出来たということではない。小さくされた人々と共にいる中で、キリストを感じさせて頂いたということである。

今朝の箇所「身分」(6 節)という言葉があるが、ギリシア語では「モルフェー」であるが、訳には他に「かたち」、「姿」と訳す。もう一つ、「へりくだる」(8 節)は、ギリシア語の「タペイノス」であるが、他に「低い・卑しい・無にする」がある。「身分」とか「へりくだる」というとき、どうしても高い身分から、低い身分へという意味合いが含まれる。もちろん、神であられる方が人間になられたわけだから当然かもしれない。しかし、神が人となられたのは、上から下へという「身分」的な、憐れみ的なことにおいてではないはず。そこに「小さくされた者」がいるからではないか。

飼い葉桶に寝かされたキリストの知らせを受けたのは羊飼いたち。当時、その社会の中で最も貧しい者とされていた人々で、常に羊の世話ばかりして雨露をしのぐ屋根さえない野宿を強いられた「小さくされた者」たちであった。

もし、天使からどこそこの豪邸のベッドに寝かされていると聞いても、彼らはそこに行くことはできない。「小さくされた者」と「小さくされた神」が共にあることを教えられたい。(神谷)